

2023. 11. 7
豊実の落葉と朝日影
森 紘一

11月5日(日)、早朝の空気はひんやりとして気持ちよかった。長岡で信越線に乗り換え、新津から磐越西線で豊実に向かった。新津駅では、会津若松ゆき「SL ばんえつ物語」の特別列車がモクモクと煙を上げてウォーミングアップ中で、鉄道ファンや家族連れがホームに溢れていた。ようやくコロナと灼熱の真夏日も収まって、行楽シーズンの出足は、徐々に昔に戻ってきたようである。



新津から豊実までは、各駅の磐越西線で一時間ちょっとかかる。車窓に広がる山並みは次第に大きくなり、紅葉の彩はすでに落葉がはじまっていた。阿賀野川沿いに進む津川あたりからの見慣れた風景にはススキの穂が揺れて、晩秋の風情が漂っている。

第20回「里山アート展」は今日が最終日、よく続いたものである。地元の秋の風物詩として定着していただけに、寂しい気もする。が、今回の旅で新しい発見や出会いもあり、縄文広場でのこれからの展開に夢と希望を抱くことができた。佐藤さんのアートへの情熱、地域を元気にしたいという夢はゆるぎなく強い。何よりも、これが柱である。花角英世県知事のご支援もありがたかった。



11時前に豊実駅に着くと、佐藤さんとマキ子さん、阿賀町ファンクラブの清水さんが昨夜宿泊したというターラさん(イスラエル・23歳)を見送りにホームに並んでいた。私は期せずして出迎えを受けて恐縮した。昨夜は7名が宿泊し、今日はオランダ人が泊まるという。豊実とは、まさにかくありたい。人とひとの出会いの場であり、「和彩館」は交流のホームグラウンドである。



午後から、”長生き清水”を汲みに馬取へ足を延ばし、地元の名門禅寺「金華山宝来寺」に

立ち寄らせていただくことになった。「悠々亭」から先の馬取にはたまに清水を汲みに来るくらいで、先代の今川魚心子（きょしんし）大和尚のことも詳しく存じ上げなかった。今回、ご住職亡き後、お寺を守る奥様から佐藤さんとお



話をうかがうことができた。「この素晴らしい本堂で、イベントができれば最高でしょうね」。そんな四方山話もさせていただきました。

持ち込んだ清水でたてていただいたコーヒーはほんのりとした甘みがあり、お陰様でゆったりした気分になりました。

馬取川沿いには佐藤さんの作品「螻蛄」も置かれていました。小高い丘の上の、今は空屋同然の眞田泰雄先生宅の庭先には、佐藤さんの彫った「ふくろう」の像が六文銭の家紋付きで飾ってありました。佐藤さんの作品が、こちらの地元にもしっかりと根をおろしているのを知りホッとしました。

翌朝、縄文広場を子細に眺めると、三内丸山の栗の柱ではないが、6本の支柱に新しい加工が施されているのに気付いた。

イスラエルのターラさんはお国の紙幣を額縁に貼り付け柱に掛けている。これは何を意味しているのだろうか？ 富士山に漆塗りのご婦人用の下駄もある。「大いに生きる」と文字も読める。赤黒い般若のお面は、「ありがとう！」イワフジ & 縄文のハハと読める。何のメッセージだろうか？ ブルーシートで囲まれた一角は、果たしてアートなのか、オブジェなのか、こんなお遊びコーナーは見て面白い。作る側もきっと楽しかったに違いない。来年の縄文広場のイベントを考えると、誰でも自由参加できるお遊び広場は人気コーナーとなりそうである。ここは実験場、演習場として有効に活用して行きたいものである。



NPO 法人 OHANA の板倉理事長とも、佐藤さんは接点を持っていた。お遊び広場は板倉さんも賛成のご様子だった。さらに、アートと縄文、音楽などをテーマにお互いの協力関係を探っていきましょうということになった。多方面に活躍する彼女のご協力ありがたい限りである。